

就職活動における“体育会有利説”についての一考察

－「体育会系就職」の実際に関するインタビュー調査を受けて－

澤田 さくら（広島大学）

1. 目的

本研究では、「体育会系就職」に焦点を当て、就職活動における“体育会有利説”の背景にあるいくつかの言説を分析し、「体育会系」という概念の今日における社会・文化的文脈について考察を行うことを目的とした。

2. 研究方法

先行研究は、とりわけ戦後の学生の就職活動において、知徳体を兼ね添えた人物という意味で「体育会系」という言葉が使用されてきたことを明らかにしている。一方、その「体育会系」に対する評価は現在、毀誉褒貶さまざまであり、画一的に捉えることが困難であることも指摘されている。

そこで本研究は、「体育会系就職」について企業の人事担当者にインタビュー調査を行い、その語りの内容分析を通して、今日の「体育会系」概念の実態を明らかにした。

【調査概要】

- 1) 対象者：人事担当者4名。内訳は小規模企業者（サービス業・製造業その他）、中小企業、大企業からそれぞれ1名
- 2) 調査方法：半構造化インタビュー
- 3) 分析方法：インタビュー内容の質的分析

3. 結果と考察

1) 就職活動における“体育会有利説”

調査結果を踏まえると、就職活動で有利とされているのは「体育会系」というよりむしろ“スポーツ経験者”であり、その背景には①評価者（採用する側）にスポーツ経験者が一定程度存在することと、②スポーツが人材評価の際非常に有用であることが明らかとなった。このことは、スポーツが企業で働くことに適した人間の資質や能力を確認するための文化的概念装置

として機能している可能性を示唆している。これが、スポーツ経験者（≡体育会系）の方が就職活動において有利である考えられてきた背景であるといえる。

2) 現代社会における「体育会系」概念

辞書的に定義される「体育会系」の語義について、インタビュー対象者から“昭和だ”という発言が非常に多く聞かれた。これは語義中で象徴的に取り上げられている「根性論」や「上下関係の絶対視」などが社会の中で否定され始めた大きな転換点と、昭和という年号・時代が結びついているからだと考えられる。上記2つの主要な要素が肯定的意味合いを弱めることで様々な価値観の介入を許しているのが現在の「体育会系」概念であり、スポーツ経験者との混同も含め、評価を多様に行っている要因もここに説明することができる。

4. 結論

本研究により、今日の就職活動で使用される「体育会系」概念の意味の揺れや差異が明らかになった。21世紀の現在においてもなお、「体育会系」は就職活動における人物評価の尺度として一定程度の意義を有しているものの、その影響力はかつてと比べれば限定的なものになっていると言えよう。

5. 主な参考文献

- 1) 束原文郎、〈体育会系〉就職の起源－企業が求めた有用な身体：『実業之日本』の記述を手掛かりに－、スポーツ産業学研究、21(2): 150-168, 2011.